体系的・論理的漢字学習法

鈴木：数学は情緒だと言われましたね。話は変わりますが、以前石井さんは、小学校で子どもたちに漢字を印刷した紙を平仮名の教科書に貼り付けさせて教えていらっしゃいましたね。

石井：ええ。いまもそれをやっている小学校が二つあります。小学校の教科書は、特に一年生のものは仮名だけになっていますけれども、たとえば「がっこう」とあるところには「学校」という漢字をガリ版で印刷し、それを小さく切って貼り付けるのです。この作業はかなり時間もかかるしたいへんなのですが、しかし、それを貼り付けたときにはもう国語の指導をする必要がなくなっているのです。理解の仕方が「学校」と「がっこう」とではまるっきり違うのです。

たとえば、よく例にあげるのですけれども、「時間」と「時刻」との違いについて、一年生から二年生にかけて教えるように指導書に書いてあります。ところが、「時間と時刻とはこういうふうな区別があって、これらは間違いやすいから注意しなさい」と言った先生が、遠足のときになりますと、「遠足の集合時間は8時30分、時間を間違えないように」なんて言っているわけです。実は、私もそれをやった一人なのですが、私の場合は即座に子どもから、「先生、8 時 30 分は時刻でしょう」とぴしゃりとやられまして、(笑)「あ、そうだ」と思いました。漢字で教えれば、一年生の子どもでも、先生が間違った言葉を使おうものならぴしゃっとやれるだけの力を持つようになるのです。平仮名で「じかん」と「じこく」を区別せよと言ったって、これでは理解のしようがないですね。「講堂」と「校舎」の「こう」の違いだってわかるはずがありません。ですから、私は漢字で書き表すことによって、奥深いところまで理解できるようになるし、言葉に対する感覚も鋭くなっていくのだと思います。

小堀(桂)：さきほど森岡さんもご質問になりましたが、具体的な概念から抽象的な概念、特に動詞概念に進んでいくのには、漢字は本当に有利だと私も思います。確かヒントは石井さんがお書きになったものからだったと思いますが、ある子どもに、「冓」はものがつながり行き交うことを表わし、それに三水をつけると水

が行き交うから「溝」、言偏をつけると言葉でそれをやるから、人に「講」ずる、木偏をつけると木が左右に組み合わさって「構」えになる、と教えまして、それでは、「貝」はお金の意味だということを知っているから、「冓」に貝偏をつけるとどういうことになると聞きましたら、やはり当たるのです。最初は「どぶ」という具体的な概念しかなかったのが、そういうことを通じて「購買」、つまりものの売(賣)り買いという意味だとわかるのです。何かが流通する、行き交うという抽象的な概念がわかってしまっているわけです。その際、女偏に「冓」というのは、さすがにちょっとはばかりがあるから教えませんでしたけれども……。(笑)

石井:おっしゃる通りです。私は五、六年生の子どもにそういうやり方をしたことがあるのですが、考えさせますとやはり当たりますね、五、六年生あたりはそういう指導が絶対に必要で、私はそれを体系的・論理的漢字学習法と呼んでいます。

小堀(桂):ちょっと気になることですが、その場合、新字体で教えられたのですか。

石井:ええ、新字体です。新字体ですと理解しにくいのですけれども、もう仕方がないのです。亡くなられた時枝誠記先生もおっしゃっていましたけれども、実際は、文字を改良することは結局より複雑化していることになるのですね。どんなにいい道かわからないけれども、道を作れば作るほど複雑になるのですから……。

小堀(桂):抵抗のしようがなくて困っています。結局新字体を作ったことによって記憶の負担が二倍になっただけですね。